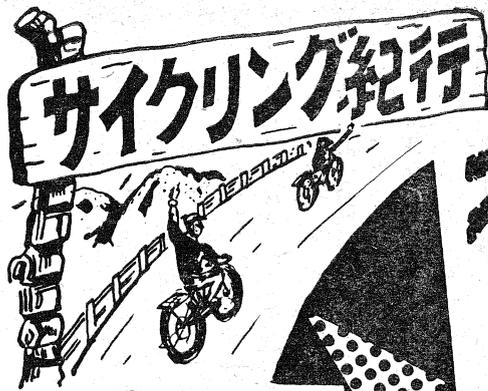


# 観望をしながら平山城趾へ

## 山本秀男



が、どうにも気に食わない空だ。三軒茶屋から集合地新宿駅西口までは、おそらく本日最高になるだろうと思われるフルスピードで走る。それでも新宿には、カメランの渋谷さん、NCTCレディサークルの平岩嬢、それに高杉君が私を待ちあぐねていた。おかげで一服する間もなく出発を命ぜられた。

も与えないことになるわけである。その鳥寄せを見るために一服する暇も与えられなかつたわけで、直ちに甲州街道を西進、本日のコースを走りはじめた。初台、幡ヶ谷の信号を通りぬけ、大原で左へ折れ小うるさい甲州街道に別れを告げる。早速話が前後左右に飛ぶ。代田二丁目から若林の通りまでは狭いが、松陰神社、吉良家の墓などを世田谷ッ子の私が

説明する場所は結構あるが、いずれも車上からの説明である。上町駅の先から左へ世田谷一丁目の三叉路に出た。右からでも左からでもいいわけだが、いずれの道をとるか、これから相談である。ここいらが小人数の気楽さだろう。右へいけば馬事公苑、放送塔、撮影所などのある、いままでとはがらりと趣をかえた田園風景になるが、それでいて近代的なおいの強い道だ。かつて北原白秋が歌集白南風（しらはえ）にまとめられたたぐさんの歌を作った明るい田園でもある。この道をとるのがサイクリングの本道かも知れないが、左への道に衆議一決した。途中は目をつぶって、瀬田から二子玉川までの爽快なダウンヒルを味わおうというわけである。

天気予報を信ずればどうにかもちそうだが、雨具だけはなにがなんでも携行しなければならぬ空模様だ。それでもいくと決めたからにはベタルを踏まずにはいられない我が社のメンバーのことだから、勢揃ができない心配はさらさらない。初冬の日、気の合った輪友と、銀輪を連ねて、近郊のポタリングは、何もかも忘れさせてくれる、サイクリスならでは味わえない、スピードと快よい疲れ……

コースタイム		1954.11.14 曇	
	時分	KM	
新宿駅西口	7.55	8.8	8.8
上子橋	8.30		
向ガ丘遊園地	8.45	4.5	4.5
聖蹟桜ガ丘	8.50		
高幡不動見晴台	9.10	6.2	6.2
平山城趾(昼食)	9.15		
平山橋	10.10	11.3	11.3
日野橋	10.20		
府中	10.40	7.5	7.5
上石原	10.50		
仙川食品工場前	12.10	4.8	4.8
初	1.00		
	1.10	1.7	1.7
	1.20		
	1.40	5.9	5.9
	2.05		
	2.20	7.0	7.0
	2.40		
	2.40	3.2	3.2
	3.10		
	3.10	7.5	7.5
	3.55		
	3.55	9.5	9.5
全走行距離	77.6KM		
所要時間	8.00時間		
走行時間	6.10時間		
休憩時間	1.50時間		
平均時速	12.6KM		

1ドメーターは一五KMから廿、廿五、

「気持ちいいなあ!」やせ細った多摩川

平山城趾

行ったのである。登りつめた聖蹟記念館

ドメートルは一五KMから廿、廿五、卅、卅五、四〇、四五Kまでグングン上る。耳がゴゴゴと鳴る。前方にかすんでいる南多摩の丘の連なりはみるみる多摩川の堤防の下に沈んでいく。残念なのはこの坂の終りに玉電碓線の踏切があつて、余勢をかつて二子橋まですべれないことだ。(蛇足と思いますが、この道だけは是非往路に選んだ方がいいと思ひます。帰りの登りはつまらないし、渋谷へぬける場合瀬田から玉電が左側を占領して自転車をとめて走りずらくしているからです)

二子橋ではじめて皆が口をきいた。

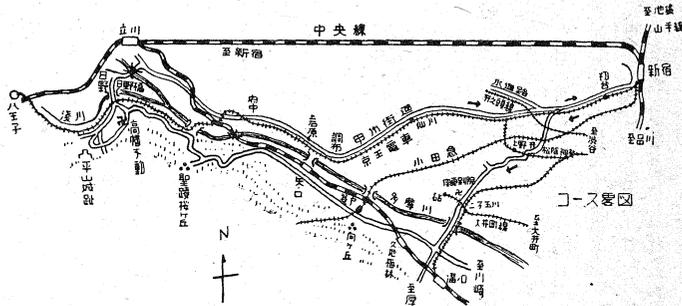


高幡不動見晴台

「気持ちいいなあ!」。やせ細つた多摩川はもうすつかり冬めいている。河原の砂利さえしらじらとして冷たくみえていゝ。煙草の煙がすうーと見えなくなる。川風が冷たい。

高津の十字路から右へ登戸までのアスファルト道路は私の好きな道である。今日は参加しなかつたが、わが愛妻にスピードを合せてよく走る道である。左は小さい丘右は畑である。水の美しい用水が左から右へ移るときのカーブはとりわけ愛着を感じている。新しいコースの魅力も又よいが、走り馴れた道には表現しがたいものがある。滅多に見たことのない

バスだが、停留所だけはきまつた間隔をおいているようにいくつもある。南武線を久地梅林で右へ見送り、バスの停留所をいくつか見送ると向ヶ丘である。かわいいケーブルカーが左に見えるこの遊園地もさすがに寒々としている。矢の口を過ぎると聖蹟桜ヶ丘への長い登りである。三年前、三軒茶屋の谷岡さんに教えられてこの道を登つたときが懐しい。平岩嬢もやはり一緒だつたが、もうすぐ終ると思ひながらいつまでもいつまでも続く坂にふうふういつた坂である。あのときは変速ギヤを見たこともない私達で



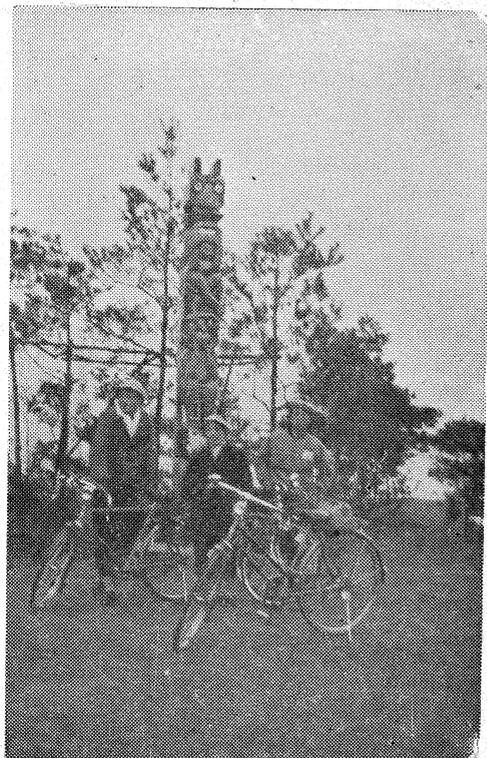
あつた。はじめから覚悟してローに落ちて半の歩みのごとくそののそりと登りはじめ。右がわが山肌で、左は米軍キャンプだろう、鉄条網が不愉快に連なっている。悟を開いた人のようにただベタルを一つ一つ確実に踏んでいくと、忙しい毎日のことが馬鹿げているかのように見える。平岩嬢は甘米後に私と同じようにコッコツとベタルを踏んでいる。ところが渋谷さんと高杉君はとつと見えなくなつていゝ。勢をつけて駆けつけのぼつて

行つたのである。登りつめた聖蹟記念館の石碑がみえたとき二人が水筒の水をラッパ飲みしているのが見えた。

桜ガ丘の眺望は、今迄の苦しさを忘れる程の素晴らしさだ。はるか遠くの左手に多摩川と浅川の合流点が見える。正面は分倍河原だ。元弘三年新田義貞が北条泰家の軍と一大決戦を行い、鎌倉勢を打破つたという古戦場だそうだ。この高台からみる分倍河原はそうして昔のことを胸の奥深く秘めて静かである。暗い谷の下にわずかにチラチラしているのは立川市だ。飛行機が降りていくのが見える。かくいふといかにも風景にのみ感じいつていたように見えるが、実はこの間僅か一分、しかもこの短時間に携行した「おやつ」をきれいに平げるといふ猛烈な食欲を發揮し、おかげですぐ眼下の関戸のなんでも屋で再び仕入れるということになつた次第である。

関戸へ出ると府中から来る本道に会う。これを右へ高幡不動までの道は平坦だ。私が十代のころはこの附近は地下水の圧力が強いので知られていたように思う。無造作に地に突刺された竹筒から水が噴き上げているのをあちこちで見てものだ。いまは全然見られない。淋しい気がする。

高幡不動には不信心な一同頭一つ下げず、また鉄のおりの中にある真正正銘の狐様も横目で見送りそのまま展望台へと登る。この道はベタルもいふことをきか



平山城趾トーテム前

ない。やむを得ず押し登る。階段はか  
ついで登る。むしろかつぐ方が楽だ。車  
が軽いという有難味をつくづく感じた。  
ここから平山城趾への山道は銀座通り以  
上だ。見晴台の展望はあまり風情がな  
い。それでも高い所へ上ったという証拠  
に写真をとった。

これから平山城趾への五軒米に一時間  
廿分を費したが、ベルの活躍はこの日の  
かせぎをこの一刻にという程すさまじ  
い。それでなければ通れない。それでも  
ノギリの歯のような起伏には充分楽し  
まされた。押したと思うとこんどはずべ  
り降りる。ペダルは大して用がないみた  
いだ。またがるか押すかのいづれかであ  
る。そして一同揃って御満悦である。群  
をなす行楽者の驚きの眼、あきれたとい

う表情も食事のときの餌になつて話題を  
賑わした。

さて目的地平山城趾へ着いたときに  
は、紫のきれいな斜面はただ人の波で、  
肝心の鳥寄せはもう終わった後のよう  
で、マイクを持った人が休憩所附近に二人  
いたので、たしかに鳥寄せが行われたとい  
う確証？ を握つただけである。それで  
も一同大して失望してはいない。鳥寄せ  
が、今日のコースをきめるヒントになつ  
ただけだが、それでよいというわけだ。  
早速昼食だ。高杉君の超特大の弁当に舌  
をまいたが、かくいう私もよく喰べた。  
トーテムの前で記念撮影をしたが、汗が  
おさまると寒さに気がついた。冷えきつ  
た弁当がよけいに体をつめたかしたのか  
もしれない。人波の間を車をひつぽつて

暖かそうな所で休む。

浅川の水の浅く、河原の石は白い。ま  
さに十一月中旬である。幸なことに河原  
に稲むらがあつたので背をもたれかけて  
伸びる。低い空はまぶしくもない。それ  
でもよく雨が落ちずにもちこたえられて  
いる。思ひ出したように皆が顔を洗う。  
これからは甲州街道へ出での帰り路にな  
るわけだ。風も西だからもう骨は折れま  
いと思ふとのんびりする。

お尻を大事にしなければならぬよう  
な石ころ道もわずかの間でまた舗装路へ  
出る。

浅川を渡り日野へ出る。

追い風に乗って府中もまたたく間に過  
ぎ、上石原の甲州街道に面した農家をみ  
つけた。庭がある。休もうと声をかけた  
ら、みんな下車してしまつた。おぼさん  
に頼んだら心よく庭を貸してくれたの  
で、子供にお菓子を分けることにした。  
ところがおぼさんは早速お茶をわかつて  
の大明でなしてある。思いがけないこと  
なので戸惑いしたが、すすめられた熱い  
茶には心から嬉しくなつた。朝から熱い  
ものはなんにも入れてない。なんべんも  
お礼をいって別れた。そして再びペダル  
を踏みはじめたが、こころなしか足もひ  
とさわ軽く、追い風にますます調子を上  
げ、今日一日のいろいろな想い出を、古  
い想出であるかのように話し合いながら  
東へ東へとスピードを上げていった。

★ Ando ★

四十有余年の研究と技術を誇る

運搬車の元祖 威力号

AND DO

威力

アンドーの自転車

株式会社 安藤自転車工場

東京・台東区・御徒町

★ Ando ★

AND DO

式 水 防 特  
車 搬 許  
車 車 威  
車 車 力  
高 号  
級 号  
車 号  
車 号  
用 号  
車 号  
人 号  
車 号  
車 号  
号